現代仮名遣い表記

四斗樽 圧縮版

（「し」と「たる」）

太田行蔵著／冬雷編集室監修

冬雷創刊 60 周年記念

現代仮名遣い表記

四斗樽 圧縮版

(「し」と「たる」)

太田行蔵著 / 冬雷編集室監修

冬雷創刊 60 周年記念

冬雷短歌会文庫

目次

四斗樽　圧縮版……5
冬雷臨時増刊号「四斗樽」編集後記
……木島茂夫…114
解説……大山敏夫…117
あとがき……小林芳枝…131

現代仮名遣い表記
四斗樽　圧縮版

はじめに

太田行蔵

歌よみが幇間の如くなる場合場合を考へて
しばらく休む

土屋文明先生の歌である。幇間は正しさを追究する気持などあつてできる商売でない。悲しきピエロ。

ピエロは私にとつては人真似のウロオボエの言葉——だから使はないがいい。言葉つてみんなそんなものですよといふは幼児の世界のこと。

文語の世界は、いくさにまけても、よその御説戒を受けずにすんだ。日本人の心は一番そこにのこる。その園の番人に見立てたら短歌の人々は怒るであらうか。

「わたつみ」ですか「わだつみ」ですかとたづねられたらすこし困るといふ不安の始末のつかぬままに、あの像はこはされてしまつたといふ。短歌の人々には国語教育に不足を言ひたいことが沢山あるはずである。日本で何よりも古いものは何かと問はれて「日本語です」と早速に答へる中学生の数を知りたい。日本語がたよりにしてゐる短歌作者たちが幇間の如くあつては困る。

短歌作者たちへの願ひをこめて書いたものであります。

〈臨時増刊号『四斗樽』の序文〉

かんのにぶり

「し」と「たる」。

形も声も全く違うこの二つの言葉。

咲きし花の「し」と、咲きたる花の「たる」とは、形の違うように、声の違うように、意味も違う。

全く違うこの二つの言葉の違いを無視した短歌の何と多いことか。次の八首はその例である。

さやかなるローマの朝日淡青の光をたたへし
泉にとどく

円形の広場へだてしサンピエトロの石階をゆ

く僧の黒き服
穴あきし石器献げたる神前に間歇にくる人の
かなしみ
瑠璃色の珠実をつけし木の枝の小現実を歌に
せむかな
おとろへしかまきりひとつ朝光の軌条の上を
越えむとしつつ
大いなる黒鯛競にかかるなく合羽着し人すぐ
に持ち去る
静かなる島々見晴らす草山に仔をつれし馬の
近寄りて来ぬ
雨を溜めし屋上を越えて見ゆる河その岸の白
きドームのたそがれ

この八首は歌誌「高嶺」の主宰者二宮冬鳥氏が昭和四十二年三月、歌誌「冬雷」に寄せた「過去助動詞しの誤用について」の中から借用した。なお沢山名のある歌人の誤用例があげられている。

二宮氏は昭和三十二年七月以来このことを短歌作者たちに訴えているが、反応は微弱とのことである。

国語教育にたずさわる人々、短歌作者たちは考えなければならない。

右八首の場合の「し」は「たる」と改めらるべきである。

中学生の教科書に、
練習はいま終った。

そら、月が出た。

などという例文をあげて、これらの「た」は過去のことを言っているのではないということをわきまえさせようとするところがある。ところが生徒は、そんなことは百も承知という顔をする。彼等は自分で、

さあ困った。

わかった人は手をあげろ。

晴れたみ空に靴が鳴る。

などという例を考え出す。同じ「た」に過去の場合と過去でない場合とのあることを、彼等は何の苦もなくかみわける。

文語には、はじめから、「し」は過去、「たる」は過去でない場合と、はっきり区別が立てられている。短歌作者の中にその区別を無視する人が実に多い。前掲の八首などは、その

悲しむべき例である。

「し」と「たる」は外観の違う通りに、音色も全く違う二つの風鈴である。耳の不自由な人にはそれがわからない。

同じ形の「た」から、過去と過去でない場合とを何のことなく感じ分ける日本人が、形の違う「し」と「たる」とからその違いを感じ分けることができなくなるのは何故であろう。

「し」と「たる」は短歌作者たちにとっては日常語である。それがそういう状態であることを、例えば「お」と「を」との違いを保存することを「愚」と言うような国語改革論者たちなら、自然のなりゆきと言うであろう。短歌作者たちはどう考えるであろう。

お前はいい子だ。

お前もいい子だ。

この「は・も」の違いは、幼児もよく感じ分ける。そういう力を、短歌作者たちに「し・たる」の上に保ち、生かしてもらいたいと思う。その作品のために、そして国語のために。

国文法の教師は、過去でない「た」を「完了」という名で教えようとする。教師用参考書は、その「完了」ということを次のように説明している。

過去における動作が完了して、なおいまだその効果が現在に存続継続している状態を示す。

いままで通りの国文法を、今まで通りの調子で学ばしめようとすることが、いかに国語にとって有害であるかを思う。

なぜならば、それは、多くの国民を国文法嫌いにするからである。国語の伝統にひそむ国民性に親しみを持つ前に、それをうるさいものと思わせてしまう。言葉そのものと心とのつながりを考えたり感じたりする興味を持たせる前に、規則を覚えさせようとするからである。

「し・たる」の話を、文法のためと受け取る短歌作者のいかに多いことか。その話なら——文法はまっぴらですという顔をする。

からたちの花が咲いたよ。

この「た」と、

みんなみんなやさしかったよ。

の「た」と、この二つの「た」の違いが感じ分けられないほ

どの頭で、どうして詩が作られよう。かんのにぶりは、詩人にとっては致命傷である。「し」と「たる」の違いは、この二つの「た」の違いと全く同じことである。短歌作者たちが「完了」という言葉を「状態」とか「様子」とかと置きかえて、「し」と「たる」とを使い分けてくれることをねがう。あなたの歌のために、そして国語のために。

合成酒

合成酒ときくと安っぽく感じる。「たる」とすべきところを「し」とする人の多いのは、それに似た心理によるか。

「たる」は「テ・アル」という二つの言葉が一つになったものだという。それならば合成語である。

「し」はただ一声で、合成の気味はどこにもない。いわば生一本である。

「たる」を嫌って「し」とする人の多いのは、合成酒と生一本の関係に似ているのであろうか。

縁側にあがる鶏や犬を追う時、外国のそれぞれの国の人々がどんなことを言うか知らないが、日本人は「しッ」という。あれを「たる」と言ったら鶏や犬はどんな顔をしてこちらを見るであろう。「し」は「たる」より強いひびきを持つ。

「たる」というべきところを「し」とした歌は、ちょっと雑誌をあければ、山ほどと言いたいほど沢山ある。

心寂しくなりはてければ夏草に埋れし甕を見
まもりてゐる

夏草に埋れている甕だから「埋れたる」がよい。たるは「テ・アル」の合成語、「テ・アル」は「テ・イル」と同じであるから「テ・アル」「テ・イル」という意味のところは「たる」とするがよい。「し」ほど強く言う必要のないところである。

曽良の句を彫りし碑のうしろ側君が一族の墓
ぞ寄り合ふ

曽良は芭蕉の弟子、その俳句の彫りつけてある碑の後側に君の一族の墓が集まっているというのであるから、「彫りたる」がよい。（彫れるでもよい）。彫ったのは過去にきまっているが、この歌の場合は、その過去であることを言う必要が全くない。

飾り棚の細縁の桜皮（かば）を貼りながら乱れし心ま
た直りくる

直ってくるのは乱れている心であるから「乱れたる」とする方がよい。

朝々に出でてしぼみし花を摘む暖かき露に我
が手は濡れて

この「しぼみし」は前の歌の「乱れし」と同じ場合である。「し

ぼみたる」とするがよい。しぼむという事実は過去のことであるが、この歌は「しぼんでいる」状態の花のことを言うのである。

そういう状態にある花を毎朝摘むという歌である。かような部分的なことに頭を使うと、一首全体で表現しようと思う気持がそこなわれるという人もある。しかし部分と全体との関係は、人のからだで考えても、また月に飛ぶ機械で考えても、そんな別々なものではない。文語で短歌を作る以上は、「し・たる」の分別を明らかにすることが、歌をすっきりさせるために、先ず必要である。メチャではみっともない。

過去・状態

僕たちはいつだって
そんな時のなかにいるのだから。

何かのどこかで、こういう文句を見た。そして方丈記の「行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」を思い出した。一旦時の流れに浮いたら、もうどうしようもなく流れ去るもの。

ところが秒速幾メートルとやらで天翔けるアポロ十一号をテレビで見ていてそれを思い出した。時の流れということを

現実感をもって感じた。瞬間に、刻々に、すばらしい速さで過去になって行くもの、それが時の流れである。現在とはそのどの部分をとらえていうものであるか。生活をそういう時の流れの上においてだけ考えると、堪えられない気がする。与謝野晶子の歌に、

きのふをば千歳の前の世とも思ひ御手なほ肩にありとも思ふ

というのがある。昨日を千年の過去と感じるのは時の流れの上において考える生活である。御手なお肩にありと思うのは、時の流れとは無関係な状態である。肩におかれし御手が、肩におかれたる御手として感じられる。これは錯覚ではなくて自然である。12頁にあげた生硬な文法書の文句がすっかりあてはまる。昨日の事が今日の事になる。「し」と「たる」

とはそういう関係にある。

「し」には物事を過去におく思い切りの強さがある。回想追憶の中にだけある物事を指す冷厳なところがある。ピシリと、しまる感じである。それにくらべると「たる」には温情がある。親近感がある。つながりが感じられる。

「し」と「たる」とは決して同じものでない。温度も硬度も違う。それを感じ分けたい。どちらでもよい、好きな方を使えなどという考えがはびこっても、この違いが無くなる道理はない。

大行・細瑾

土屋文明先生の三十年ほども前の歌に、「ミス潮路幸代をかなしむ」という十首連作がある。アメリカで生れた若い二世女性で、アララギに投稿していたらしい人を追悼したものである。第一首は、

たどたどしき母の国語をつづりつつ其の真心はかくすなかりき

というのである。母の国語は日本語。第六首は、

異国に若き嘆きを母の言葉によせむとしつつ今はなきかも

というのである。むこうで生れてむこうで育ったのだから日本語に不自由は無理もない。土屋先生に何かよい日本語の文法の本は無いかとたずねてよこした。そのことについて第五首に、

日本語の文法の本をたづね来ぬかまはず歌へと吾答へにき

とある。先生は人を見て法を説いたのである。短歌作者によい文法の本など無いことも事実だが、先生にとっては、たどたどしい日本語でつづられた、かくすことなき真心が嬉しくもあったろう。それが短歌の本筋だろう。ところがこれを、文法などかまわず歌えという御託宣ととって、「し」と「たる」の違いなど気にする必要なしという指導要領にすりかえる指導者がある。「し」と「たる」の違いを問題にするのは文法

のためでなく、そのおのおのが持つ特性を生かしたいためである。人の心の真が大事であると変ることなく言葉の真も大事である。気がつかないうちは仕方がないし罪もない。しかし言われてからも気がついてからも、かまわず歌えと開き直るのは無法者であり怠け者であり御機嫌取りの先生である。

昭和四十四年八月号アララギ其一欄の中から、目につくまま、「し」か「たる」かの歌を拾ってみる。

神島は家立ち暗く重なりて濡れし・如くに浪の
上に見ゆ

来り住み二十二年か荒れし・庭におかめ笹二株
移し終りぬ

草そてつかがやく陰のヤブレガサ長き花茎た
ちし・楽しも

靄ごもり雨ふる庭に裏山の水をたたへし・甕ひ
とつあり

原生林の中の汚れし・雪の上立つ風ありて俄か
に寒し

ふくらみし・冬菜の茨に寄る小鳥時の間にして
茨を噛みゆく

刈跡を此処に来りて日を浴むる盲ひし・人を見
つつ思へり

このふるさとわが住み捨てし思ひ寂し茅花呆
けし・野今日よぎりつつ

うるみつつ低き夕月かかるにも少し日永くな
りし・と思ふ

刈り伏せし・麦に雨ふるこの谷のなほ水上の妻

のふるさと

これらの歌のその部分は、いずれも口語で「テイル」と翻訳するとピッタリする。そういうところは「たる」がよい。「濡れテイル如く」は「濡れたる如く」、「荒れテイル庭」は「荒れたる庭」。子供だましのような話であるが腹を立てずに、ひそかに試みていただきたい。「花茎たちたる」では長くなりすぎるというなら「立てる」がよい。「たる」と「る」とは同じだそうである。語呂も似ている。

目下のところ大家の作にも「し・たる」の困る例は沢山ある。ただ大家の名作には大行細瑾を顧みずと言われる趣きがあって、全体で圧してくる力が強い。しかし小家はそれをまなぶべきでない。大行にも細瑾は無いに越したことはない。何者にとっても瑾は瑾である。

俳句は短い。それだけに利きのよい言葉がほしい。俳句を引合いに短歌の言葉を論じると埒があかない場合がある。「し」も「たる」も、しばらく短歌の世界だけの話とする。

「し」の例（万葉集）

（　）内は巻数と歌の番号

去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹は
コゾ　ミ　　ツクヨ　テラシテ　アヒミ　イモハ
タ　　ツキ　　ルガ　トモニミタ　ツマ
いや年さかる（二。211）
イヨイヨ　トシガトホザカル

柿本人麿の歌であるという。「し」はこの歌のように、主として自分に関係のあった過去の事実を回想する時に使う言葉であるという。したがって、しみじみ・しんみり・しみる、などという言葉の「し」にもつながりがありそうな気がする。何でも過去のことならば「し」を使うということでなしに、

しみじみ思いめぐらす過去の自分の生活に関係のあった事柄をのべる時に使うというワクをおいて使いなれるようにするがよい。

吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど
ワギモコ　　トモ　ウラ　ムロ　　トコヨ　アル
ワガツマ　　　　　　　　　　　　　ガ
見し人ぞなき（三。446）
ソレヘナイ

大伴旅人の歌。九州大宰府の長官として赴任する時同道した妻は任地で病歿した。鞆の浦（福山市）のネズミサシの木は永久的な姿を見せて立っているが、これを見た妻はもういない。任を終えて都に帰る時の過去回想の嘆きである。あとにつづく四首にも過去回想用の「し」が使われている。

鞆の浦の磯の室の木見む毎に相見し妹は忘らえめやも（三。447）

磯の上に根はふ室の木見し人をいづらと問はば語り告げむか（三。448）

妹と来し敏馬の崎を帰るさに一人して見れば涙ぐましも（三。449）

敏馬崎は神戸の近く。いよいよ都も近くなった時の嘆きである。「さ」は接尾語。

行くさには二人吾が見しこの崎を一人過ぐれば心悲しも（三。450）

五首に「し」が六つある。思出の多い旅をしつつ帰って来た証拠に「し」という思出用語が多く使われている。旅人の酒の歌は有名であるが、十三首の中に「し」は二つだけである。過去回想でも思出でもない歌に「し」がむやみに多いのはおかしい。

旅人が長官の時、次官が都の中央政府に転任することになった。その送別に旅人は

君がためかみし・待酒（まちさけ）夜須（やす）の野に一人や飲まむ
友無しにして（四。555）

（ノ　カモシタ　?!）

という歌を作った。待酒は接待用の酒だという。御馳走しようと楽しみに仕込んだ酒だったのであろう。夜須という地名は現在もあって、大宰府からピクニックするによい所であったらしい。都に帰る人を送るにも、その辺が「それでは」と言って袂をわかつ処だったかもしれない。それはさておき、この歌の「かみし・待酒」をいうところ、過去回想用語「し」が使われているが、そこを「かみたる・待酒」とするのと、どう意味が違うであろうか。

君がためかみし・待酒
君がためかみたる・待酒

こう二つ並べてみて、どんな意味の違いを感じるか。

A　あ・のことは誰にも話してくれるな。
B　こ・のことは誰にも話してくれるな。

このABの違いはよくわかる。Aは過去のことを言っている。いつかのあのことは秘密にしてくれというのである。Bは今のこと、今日のこと、現在のことを言っている。

「あの」と「この」との現す意味の違いは「し」と「たる」の違いに似ている。

君がためかみし・待酒は、君のためにかもしたあ・の待酒である。「かみたる」とすると、君のためにかもしたこ・の待酒ということになる。酒は目の前にあることになる。

旅人がそういう酒を仕込んだことは、その送られる同僚も知っていたのだろう。その頃の酒は幾日位で物になったか知らないが、送別会には間に合わなかったのではないか。旅人はそれを残念がって、あれも一人で飲むことになってしまったのかと言ったのがこの歌であろう。転任命令が急だったのかもしれない。仲良しの飲み相手だったらしい。

「し」と「たる」との違いをはっきりさせたくて日常語の「この」・「あの」を引き合いにしてみたが、前の歌は「行くさには二人吾が見しこの崎を」と、「し」と「この」とが結びつけられている。「し」と「あの」とを結びつけた意見は根拠薄弱な思いつきのようにとられるかもしれないが、次の歌はやはり「し」の下に「あの」を置いてみると意味がよくわかる。

いづくにか船泊(ふなはて)すらむ安礼(あれ)の崎(さき)こぎたみゆき
ドコ ニヲ フナドマリスル ダラウ ヲ メグツテ イツ
し棚無(たななし)小舟(をぶね)（一。58）
タ

前の歌の「かみし・待酒」を目の前には無い酒のことと考えたように、この歌の舟も、もう目に見えないものとして、あの小さな舟はどこで寝るだろうと思いやる歌と解釈するがよいと思う。こぎたみ行きしあの・棚無小舟。棚とは、ふなべりを船頭の歩く板。それをさえもない小舟が棚無小舟。安礼の崎は愛知県の渥美半島辺の岬だという。作者はその陸上から小舟を見たのか、それとも船にいて、すれちがいに視界を去った小舟を思いやったのかというようなことを考えるのも楽しみであるが、「こぎたみ行きし」を「こぎたみ行きたる」（或

は「こぎたみ行ける」）としてみて感じの違いを考えるのも面白い。何かで見た近頃の歌に、

動くともなく遠ざかりし赤き船雲たるる海の上を一つゆく

というのがあった。この歌の赤き船はまだ視界のうちにある。雲垂るる海の上を行くのが見えている。そこで「遠ざかりし」を「遠ざかりたる」としてみたくなる。遠ざかるという事実はまだ現に目の届くところで行われつつある。それなら単に「遠ざかる」でもよくはないか。自分で作る場合にも、他人のものを読む場合にも、「し」については、いますこし注意深くする必要がある。文法のためにではなく、意味や調子をシャンとさせるためにである。

防人の歌にはさぞ「し」が多いことだろうと思った。防人といえば応召兵士であるから、故郷を離れ父母妻子をあとにして出発し、旅の日を重ねて行く間、過去回想の機会が多いはずである。過去回想用語「し」を使った歌が多いはずだと思った。ところが少い。「し」を好んで使うような心境にあっては強い兵士になれなかったかもしれないし、気の弱い過去回想歌は上官が採用しなかったかもしれない。だから万葉防人の歌には「し」が少いのかとも思う。しかし「し」が過去回想用語であるということを、はっきり頭にしみこませるにはよい例が多い。

父母がかしらかきなで幸くあれて言ひし言葉ソ忘れかねつる（アタマ ヲ ナデテ サクシャニ クラセト ラレナイ）（二十。4346）

我が母の袖持ち撫でて我が故に泣き し 心を
（ガ）　（な）　（から）　（ノタメ）

忘らえぬかも（二十。4356）
（ワスレ）　（エザル）　（カナ）

芦垣の隈どに立ちて吾妹子が袖もしほほに
（あしがき）　（くま）　（スミノトコロ）　（わぎもこ）　（シホタレ）　（テ）

泣きしぞもはゆ（二十。4357）
（ナイ　タ　ソレガ　オモハレル）

「しほほに」は「シオオニ」と発音すること。これらの歌には、それが過去のことであることを示す言葉、たとえば「その時に」とか「別れる時に」とかいう言葉が自然に無理なく添えられる——というよりも、「し」は自然にそういう言葉

を引き出す。「し」はそういう時に使う言葉。字引の「し」のところに、

①過去の直接の経験を回想する語。
②想起したる事柄を表わす語。
③後世誤って過去の動作・作用の結果の存続を表す。

としてある。28頁に引用した（人麿の）歌はこの③にあたる。

晴衣著し隣の娘その後のあはれは貧しき町の
常のこと（土屋文明）

この「晴衣著し隣の娘」は想起した事柄で②にあたる。

秋さらば見つつ思べと妹が植ゑし宿の石竹咲
（アキニナッタラバ）　（ゑぬ）　（いも）　（オモヒダシテクダサイト）　（うチ）　（なでしこ）　（サイ）
きにけるかも（三。464）
（タ）　（ヨ）

大伴家持作。亡妻の追憶。彼女が在りし日にそう言って石竹を植えた。それは作者の直接経験した事柄であるから「妹が植ゑし石竹」と言っている。①にあたる。

「し」の例（青南集・続青南集）

（　）内の「青」は青南集。「続」は続青南集。数字は頁。

「し」は過去をあらわす。したがって「ここにありし橋」に対しては、「去年まで」とか「前から」とかいうような文句が必ず添えられる。逆に言えば、「し」は、「以前」とか「かつて」とかいう過去の意味を持つ文句を呼び出す。

ほのほ立つ燠（おき）に向き合ひ餅焼きし父が手の動き今も見るごと（青。八五）

【子供の頃】炎の立つ燠にむかい合って餅を焼いた父の手

の動きが今もありあり見えるようだ。この文の【　】の中が「し」によって呼びおこされた文句である。子供の頃といえば過去のことにきまっている。そういう過去を回想する場合に「し」が使われる。その過去も主として自分が直接経験した過去を回想する場合が相応しい。

みやこ草芝にかくるる芽を見れば奈良の佐紀野に掘りて来しもの（青。三一）

芝の下にこっそり芽を出している都草、それは【いつか、私が】奈良の佐紀野から掘って来たものだ。

我の来し早き春の日和やかにて此の二階に上り給ひしものを（青。六六）

【その年】私の来たのは早春のおだやかな日だった。【その時、氏も私共と一緒に】この二階におあがりになったものだったのに。中村憲吉氏を追憶しての歌である。「し」が二つ使われているので、それだけ回想の情も強くひびく。

農に堪へぬからだなりしを長らへて伝へ聞く農の友多く亡し（青。一五二）

【自分は少年の頃】農業にはたえられない弱いからだだったのに長生きして、噂にきくと農業に従事した連中の多くはもういない。

遠き代の言葉ひびくと我が聞きし翁媼のこゑいまはなし（青。一七一）

【かつて】私が古代の日本語を聞く気持で聞いた老人たちの声はもう聞かれない。言葉の伝統をなつかしみ大切に考える作者の心持がよくわかる歌である。

潔よく東京去りし久米正雄も七日留らざりし
心も思ふ（青。一八六）

【その時】思いきりよく東京を去った久米正雄も七日とはそこにいなかった。その気持もわかる。久米が郡山の母の居所に帰った時を回想している。二人は親友だった。

腕白に遊び育ちし久米よりも育てし母君を思
ふ涙ぞ（青。一八六）

この歌には【　】の中に入れる文句が、うまく考えられな

い。久米の腕白な道楽者であったこと、父亡きあとの母の苦労、そういう過去が作者にはよくわかっているから、「し」を二つ使ってそれを言っている。作者にとっては過去の回想であるが、読者には、久米とはそういう男だったか、母親はそんなだったのかという二人の様子の説明をきく思いが先立つ。つまり二つの「し」を「たる」としてみても読者には作者ほどの不満は感じられない。作者の情は「たる」では納まらない。そんな場合は、読者は「し」を通して作者の回想の情を敬意をもって思いやって一首を味わうよりほかはない。無論その「し」を「たる」としてみて自分が作る場合の勉強にすることは失礼でも何でもない。

何を願ひ雲取越ゆと企てしすぎて思へばただ

ただ空し（続。三）

【かつて、自分は】何を願って雲取峠越えを思い立ったのであったか。今になってみると全く空しく感じられる。

山靴を買ひてふた年時待ちし雲取越えを果しやすらぎ（続。二十）

【その時、私は】山靴を買って【それから後】二年も実行の機会を待った。その念願の雲取越えを【かように今や】果した安らかさに居る。

二番目の【　】の中を「かように今や」としてみたが、それだと「し」と合わない。そこを「果したる」とすれば合う。「果したるやすらぎ」として読んでみても調子は悪くない。大家の作品をそんな具合に読むことも、我々の勉強であり楽しみである。そう思う。

出で入りし過ぎし留まる面影の中に保たむ余る齢か（続。五七）

【かつて、ここに】出入りした人々の面影、【すでに】なくなった人々の面影、現在とどまっている人々の面影の中にまじってなお続ける私の余生か。この「か」は疑問三分感動七分の「か」。「保たむ」の「む」は多分に可能の意を持つ。可能の意を強く感ずれば「余生を保つことができるか」という意味になって、「か」の疑問の分量がふえる。これはアララギ発行所の思出の歌であるという。

わが植ゑしうけらが花は年久に絶ゆるなく花

になることもなし（続。一〇三）

【かつて】私が植えた【あの】ウケラの花は幾年たっても生きているが花にもならない。前にあげた大伴旅人の「君がためかみし待酒」のところで言った「この・あの」を思い出す。

なびきあひし薄は何時の日よごれたる今日の時雨に煤のしたたる（青。三〇）

この歌も「この・あの」を思い出させる。なびき合った【かつての、あの】ススキが、いつの間に【こんなに】よごれたのか。今日の時雨で黒い滴をおとす。

「たる」の例（万葉集）

ささなみの国つみ神のうらさびて荒れたる都
（小・細 ノ 心 荒・寂 テヰル）
見れば悲しも（一。33）
（ミルト！）

かような場合に、「たる」でなく「し」を使って「荒れし都」とするのは間違いであるということを、はっきり呑みこみたい。「たる」は「て・いる」のつづまった言葉で、「し」とは全く意味が違う。万葉仮名では「あれたるみやこ」を「荒有

京」としてある。荒れた状態が現に目の前にある場合は「あれし」でなく「あれたる」という。

土屋文明先生の万葉集私注第一巻九十頁に作者のことその他があって面白い。その中で柿本人麿の作品とこの歌の作者（高市黒人）の作品とをくらべて、この歌の作者は「大体の規模が遥かに人麿には及ばない。思考過程も情意運動も小刻みである。それは声調の上にもよくあらわれている。事実を把握する力もまるで違っている……」としている。釈　迢空（折口信夫先生）はそこのところを「二首ながら、前の人麿の歌よりも、更に傑れている。人麿のにはまだまだ虚偽が見えているが、此には、人の胸を波だたせる真実が籠っている。」と言っている。二人から相反するような批評をあびせられている二人の作家（人麿・黒人）のその四首を並べてみる。

楽浪之　思賀乃辛碕　雖幸有　大宮人之　船
麻知兼津（一。30）（人麿）

左散難弥乃　志我能大和太　与杼六友　昔人
二　亦母相目八毛（一・31）（人麿）

古　人爾和礼有哉　楽浪乃　故京乎　見者
悲寸（一。32）（黒人）

楽浪乃　国都美神乃　浦佐備而　荒有　京
見者悲毛（一。33）（黒人）

短歌作者が歌会などでひどい批評をかぶって身も世もあらず嘆き沈むという話をよく耳にするが、人麿も黒人も気が弱くてはやって行かれまい。歌の見方感じ方は評家によってさまざまであるが、言葉の「し」と「たる」とは大昔から相場がきまっていて動かない。「し」は過去回想用、「たる」は様子状態の説明用。乱れし語法は直しようもないが、乱れたる語法は直し得る。

都なる荒れたる家に一人寝ば旅にまさりて苦
（ニアル／テヰル／クル）
しかるべし（三。440）
（シクアル）

「寝ば」を口語で言えば「ねたならば」であるが、その「た」には少しも過去の意味はない。過去の意味のない口語の「た」に当たる部分を文語にする場合に過去の意味を持たせて「寝し人」などとすることの誤りは言うまでもない。この歌は妻を失った大伴旅人が九州から都に帰る時の作で、旅人はその翌年に歿したという。

梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつつ遊び
（サイテ／キル／カミノカザリ）
くらさな（五。825）
（クラシ／タイ）

「しつつ」はシナガラ、或はシテハというにあたる。「くらさな」の「な」は自分の希望を言っているのであるから、クラサウと訳してもあたる。「この日暮れなば」などという時

の「な」とは全く違う別の言葉であるから注意を要する。自分が歌を作る場合には、うろおぼえの言葉は使わないという掟を立てておくがよい。

春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜（よ）
ハル デ アルカラ ドウリデ マア ヨノ
睡（い）も寝（ね）なくに（五。831）
ネムリモ ネムラヌ コトナリ

なるほど春だ、梅がこの通り咲いた。お前さんが気になって安眠できない。そういう意味だという。「君」はその梅の花のことだというのは、注釈書を見て知ったことで、独力で読んでいればもっと通俗的に、誰かのことを言っているのだと思って通ってしまうだろう。しかし大事なのはまず独力で

あると、何業につけても大方の人が言う。「寝なくに」の「なくに」を「ヌ・コト・ナリ」と扱うこと、ことに「に」を「ナリ」と思うことは独力すぎるかもしれないが、「し」と「たる」のとりちがえより罪は軽いかと思う。いずれにしても、あやふやに感じられるところを、そのまま通る習慣は早くとり去る必要がある。あやふやのまま使って、それに慣れてしまって、それでいいのだと理屈をこねるようになれば、もうつける薬はない。

玉敷（たまし）きて待たましよりはたけそかにきたる今宵
リツパナシタクシテ マタウ ヨリ モ フイ ニ
し楽しく思ほゆ（六。1015）
ソ オモハレル

先方の主人が客人たちに「あらかじめ君来まさむと知らませば門にも宿にも玉敷かましを」と挨拶したのに応えた歌だという。主人が「玉敷かましを」と言ったのに客が「玉敷きて待たましよりは」と似た口調で応えたのである。「まし」は「もしおいでとわかっていたら、こうするのだったのに」という場合に使う言葉だというが、現代の人々には縁遠いものになってしまっている。「し」と「たる」はそんな縁遠い言葉ではない。古典語と言ってイツショクタにしてはなるまい。「来し」を「来たる」とすると、その場の挨拶には向かなくなる。「たけそか」と「たまさか」とは口調の似ている言葉である。

山吹（やまぶき）の咲きたる（サイテヰル）野辺のつぼすみれこの春の雨
に盛りなりけり（デアルヨ）（八。1444）

「この春の雨に」の「に」の意味をどうとるか。盛りなりけりの「けり」を「ヨ」と訳してあるが、それでよいかどうか。咲きたる・咲きしの別を考えるように、そういう小さな形の一語一語の意味をおろそかにしない習慣をもちたい。美しい歌を声を立ててゆっくり読み味わう楽しみは言葉を本当に自分のものにする工夫の一つであろう。「し」と「たる」の別を感じ分ける人が少くなるのは、音読の習慣が少くなったからかもしれない。「し」は気持を引きしめて一方に引きつける気味を持ち、「たる」は平らな展開の気味をもつ。これは音読によい歌である。

吾が園の李（すもも）の花か庭に散るはだれのいまだ残り
！　（ハダレユキガ）
たるかも（十九。4140）
（テアル？！）

この歌は作者（大伴家持）が、庭の白いものに目をつけて、オヤあれは斑雪がまだ残っているのか、それともうちの園の李の花が庭に散るのかと目をこらす気持を表したものであろう。ところがそこを「自分の前栽の李の花が庭に散っているのか…」とした解釈本がある。「散る」を「散りたる」と同じに扱っているのである。下の「残りたる」の「たる」を上に持ってきたのである。意味が違ってきてしまう。そういう大まかな、粗雑な把握のしかたを大雑把という。言葉の命を

さぐる場合には「大雑把」は美徳ではない。

この歌の李の樹はどこに立っているのか。その解釈本には「前栽の李の花」としてあるが、歌には「園の李の花」とある。前栽は字引に「ざしきの庭」とある。植木の植えこんである表の庭であろう。普通「庭」と言っているが、表の庭であろう。それに対して「園・その」は「背野」の意かとしてある。背は前の反対である。前栽と反対の位置、屋後にあるのが背野・園ではないか。少なくともこの歌では園と庭とが区別されているのではないか。作者は園の李の花が庭に散るのかと驚き疑って、「わが園の李の花か庭に散る」と言ったのではないか。

家持はこの歌を作った頃、越中に住んでいたという。邸の裏手は山寄りになっていたのかもしれない。とにかくその辺

にある李の花が表庭の植込みの中まで散ってくるとは思わなかったのであろう。この歌は邸の様子をいろいろに想像させるし、花か雪かと疑わせ驚かす不馴れな土地の季節のことも思わせるし、見分けに迷う光線のにぶい時刻を思わせもするし、「極めて平凡な感じの歌である」などと言ってしまっては当らない歌であると思う。

「たる」の例（青南集・続青南集）

秋ののげし枯れたる・・幹は垣越えて我が庭の上
　にその実をこぼす（青。二）

幹はカラと読む。枯れるという事実は過去になったとしても、その結果は「枯れたる」という状態として目の前にある。だから「枯れし」とは言わない。枯れしではそこが六音になるから、七音にするために「枯れたる」としたのではない。

食らふべき木の芽すぎたる・・時に来てまた山ふ
　ぢの短きにあふ（青。七二）

「べき」はデキルとか適当なという意味。この「すぎたる」を「すぎし」としてみて、それでは道理に合わないと感じ分けるまでには時間がかかる。「たる」を、思いきって、現在目の前の物事のことを言う場合にだけ使う言葉ときめてしまって、慣れるがよい。たとえば徒然草、それは昔、兼好法師が書いたものであるが、現在、どこにでもある本であるから、それについて言う場合は、次のＡＢのＢよりはＡがよいと、自分の方針を確立してかかる。そういう訓練を自分に加える。それは文法のためでなく、自分の心の持ち方、生活態度をしっかりさせるための修行の一つとして。

Ａ　徒然草は兼好法師の書きたる本なり。

Ｂ　徒然草は兼好法師が書きし本なり。

山人もつれたる犬も濡れそぼちおづる我が前

を素通りに行く（青。七四）

びしょぬれの山人と犬とがずんずん近づいてくる。犬嫌いの作者は少しばかり恐れる。その前を彼等は素気なく通過する。まことに面白い場面である。つれたる犬は「ひきつれたる」とも「つれだちたる」とも両様に考えられる。都会でのことでないから「つれ立つ犬」の方が情景が自由に活発になっていい。そこを「つれし犬」とすると調子が窮屈にしまって光景が面白味を失う。「おづる」はビクツクこと。

かわきたる沙にみじかき南瓜蔓今朝咲く花の

生々として（青。七六）

沙と砂はどちらでもよい。それこそ好きな方を使えばよ

い。そういう自由は「し・たる」の上では制限される。こんな場合の「たる」を「し」とした歌が実に多い。二三例を拾ってみよう。

休み日のこころ楽しと彫りつぐに傾きし日の
はや窓にさす

卓上の造花いち年咲きしままなれば悲哀を寄
することなし

日照雨すぎし千光寺山のぼり来れば涙のごと
き雨溜めし岩

開かれし水門に寄る黒き潮水泡をともなひて
落つ

感覚の無くなりしごとき腕ふりて暑き夕べの
樹林を行けり

際限がない。間違いときまったことが平気で行われている環境は誇張して言うと悲しい。土屋先生の歌をいま少しあげてみる。

極まりて弱くなりたる冬の日に撫でてあはれ
む菜畑の煤（青。八四）

「晴れたみ空」を文語にするなら、この歌の「なりたる」のように「晴れたる」である。「晴れし」ではない。

山の上に岩に溜めたる水ありて曇にひびく一
つ蛙のこゑ（青。一二一）

冬の実の落ちたる土にむらがりてあさる小雀
は遊びとも見ゆ（青。一五一）

わが齢よろこぶ幼き三人の前旗をたてたるオコサマランチ（青。一七三）

作者七十の賀の心祝いに幼孫三人をつれて一家がどこか食堂に行った時の歌である。情景がおもわれ、片仮名でオコサマランチとした効果もこころにくく効いている。ところが「旗をたてし」として読んでみると温かなゆとりがしぼむ。「し」という言葉の性質による。旗をたてたのは調理場で、それは過去に属する事柄であるが、それはこの歌には関しない。「たる」の実によい例である。

耳近く口よせ問へば八十を三つか四つかは過ぎたるべしと（続。一二六）

「過ぎたるべしと」は「過ぎしならむと」などとしても通りそうであるが、読みくらべてみると違う。温味が違う。幼児が「お前はよい子」の「は」と、「お前もよい子だ」の「も」とを感じ分けるように、「し」と「たる」とを感じ分けるようになりたい。

玉島川水は少く見ゆれども澄みたる流れいさごのいろ見ゆ（続。一八〇）

澄みし流れでは流れの様子を言うことにならない。過去のことを言っている歌ではない。こういうところを「澄みし流れにいさごの色見ゆ」とした歌が多すぎる。

温泉の山の夕霧寒く吹く老いたる我等とどまりがたし（続。一八八）

老いたるとすべきところを「老いし」とした歌も多い。老人を過去の人とはいうが、現在の状態をいう場合は「老いたる」である。中学生の教科書にも、「さきのまがった筆」の「た」を過去とまちがえるなと注意しているところがある。短歌を作る大人になった時「さきの曲がりたる筆」と「さきの曲がりし筆」との区別がわからぬようでは困るからであろう。

「し」と「たる」との違いをわきまえて歌を作るようになったら、どんなに気持が晴ればれとして、筋目正しい作品が多くなることであろう。

「し・たる」共存の例（青南集）

青山と萌えたる山の向うなり一日の食に我が入りし谷は（青。三九）

青々と新緑におおわれた山―青山と萌えたる山は目の前にある。一日の食糧を求めに入った過去の―戦争当時を回想させる谷は、その向うにある。し・たるが実にあざやかに使い分けられている。

それがあざやかに使い分けられるということは、明確に感じ分けられているということである。認識がふらついていない。

生徒服着たるは金石ともう一人そのありし様
も我は忘れぬ（青。一五八）

古い写真に金石淳彦君ともう一人が生徒服を着ている―そのテイルがたるである。それらの人々と話したり笑ったり食べたりした事実は過去―ありし様である。その様子も自分は忘れたというのであるが、その「も」の意味はどうか。「その」は何を指すか。「忘れぬ」を「忘れない」と解くのはどこに無理があるのか。およそそういうことを考えることは創作にも鑑賞にも有害だという意見にはどう応えるか。「忘れぬ」と「忘れたり」とはどう違うのか。―ああ面倒だ、うるさいという人は、画家なら色の選択をいいかげんにする人であろう。

ありし君が名をかかげたる見世の灯よ上総湊
の夕の道狭く（青。一五九）

千葉県湊町で、旧友の生家を見て通ったのであろう。生前の名がそのままかかげられている。老舗によく見る風習である。同じ名にまつわる過去と現在、それが催す感慨が整然と「し」と「たる」とで置き分けられている。

早く葉を落ししし紅梅やしなふにひとつ咲きた
る秋のくれなゐ（青。一九九）

紅梅が衰えを見せた。それが早く葉を落ししである。それから後はその紅梅に特に目をかけて大事にしてやった。その結果が、秋口に一つ紅の花を見せるという事実になってあら

われた。この、ひとつ咲きたるの「たる」は、童謡の「咲いた咲いた桜が咲いた」のたと同じである。過去のことを言っているのではない。花の状態を言っているのであって、「時」とは関係がない。言えば現在である。

苦しみし奥歯を抜きし後にして朽ちたる前歯
ほろほろと落つ（青。五）

苦しんだのも抜いたのも過去のこと。ほろほろと落ちるのは朽ちるという状態の前歯。「わかった人は手をあげろ」の「た」も過去のことではない。わかるという状態にある人が「わかりたる人」である。

この海に来し幾度ぞ来るたびに食ひたる魚の

数は知らえず（青。一九四）

この歌で、「食ひたる」を「食ひし」としてはなぜいけないかを理屈で説明しようとすると、文法の先生も困るだろう。しかしこの歌はいつどんな場合に作られたかを考えると疑問がとけてくるような気がする。食事をしながらの歌か、海岸に立っての歌か。食事しながらとすれば「食ひたる」が合う。「たる」には「テイル」という意味があるからだろう。

ふた度の火にくづれたる墓石のはや感傷をこ
えし思ひす（青。五）

東京亀戸の伊藤左千夫の墓は震災と戦災とで、「くづれたる」状態にあるという。作者にとっては縁の深い墓であるが、その状態に対する感傷的な気持は、もはや過去のものとなっ

たような気がするというのである。「こえし」とあるのでこえたるというよりも、すでに思いきりのついている気持がわかる。「し」には、物事を現在から離して、現在とのつながりの無い位置において考えさせる冷徹というような気味がある。

「し」と「たる」との違いを理屈で考えようとせず、音色の違いで感じ分けられるように慣れるとよい。西洋の詩人に、Aは黒、Eは白、Iは赤、Oは青、Nは緑と言った人があるそうだが、「し」と「たる」とに対していますこし敏感になることが、短歌作者たちにとってはさしあたって必要な問題であろう。

垢じみた襟（石川啄木）

啄木は「し」と「たる」との区別などすることをうるさく考え、将来は口語「た」としてしまうがよいと思ったのであろうか。

垢じみた・袷の襟よ
かなしくも
ふるさとの胡桃焼くるにほひす

この「た」は「し」か「たる」か。「焼くるにほひ」と文語をえらんでいるくらいであるから、口語論者ではなかった

ろう。

終戦後、キリスト教会ではバイブルの文を口語にした。しかし次第にそれを後悔している人が多くなりつつあるという。本当のことかどうか知らないが、口語では文語の持つ詩的な調子が出せないことは事実である。宗教から詩の情味を去ったら成立は困難であろう。そんな意味から、文語を、文語と呼ばずに詩語と呼ぶことも考えられる。

それはともかくもとして、この啄木の歌の「垢じみた」は垢じみたるがよいか、垢じみしがよいか。

外套の襟に頤を埋め
夜ふけに立ちどまり聞く
よく似た声かな

これは「似し」か「似たる」か。

重い荷を下したやうな
気持なりき
この寝台の上に来ていねしとき

この歌などみると気の毒である。「し」と「たる」の区別どころか疲れきっている。そんな言葉づかいなど超越して読むべきかもしれない。そういうことが多くの歌人にもあるだろう。だから、そうならないうちに勉強しておきたい。疲れきった、弱った人などに持ちかける話ではない。啄木もちゃんとした例はちゃんと遺してある。

頬につたふ

なみだのごはず
　一握の砂を示しし人を忘れず

これを「示したる」としてみると、理屈にも合わないし、調子も悪い。

　寝つつ読む本の重さに
　　つかれたる
　手を休めては物を思へり

これらはいずれも「し」と「たる」の違いを説明するによい材料である。啄木の歌にその違いを無視したものが多いなどと言って、その無視を進歩ととりちがえた論をすべきでない。なぜならば、それは言葉の持つ命を無視することであるから。

き

色は目から頭に入る。声は耳から頭に入る。目で見る色の「き」と耳できく声の「き」との、頭の中での作用は似ている。共に刺激が強い。

字引に、黄は白をのぞけば最も多く光を反射する色としてある。きをつけろという場所には、きの色のペンキを塗る。

「き」と発音する言葉はみな強い。酒もキであり城もキである。共に命はその強さにある。生ビールの「生」はキかナマかと閑な人が論じるが、その純粋性、利きのよさを言うつもりの名ならキであろう。生糸・生薬・の生もその意味だろ

う。強さを示すためには牙（キバ）がある。「きしむ・きしる」という言葉も「き」の音から生れたに相違ない。

画伯林武氏の尊父君林甕臣先生の『日本語原学』を見ると、毎日の自分の言葉の成り立ちを考える興味を与えられる。そこに言われているいろいろなことが、子供の頃の国語の時間にどうして話してもらえなかったかを残念に思う。国語教育界が、どうしてああいう面白い、しかも根本的に物を考える気持を育てるによい傾向を採用しなかったか、不思議な気がする。自分の毎日の言葉について根本的に考えることは教えられずに国語を尊重せよというお題目だけは常にきかされた。土台のもろさと上塗りの美しさとを過去の国語教育に感じる。その結果の小さな一つが、「しとたる」との違いがわ

からぬ短歌作者が多いという事実となってあらわれている。日常の言語生活上のたるみと国民の運命とのつながり加減を思うと、国語教育には根本的な改革が必要である。今からでも遅くはない。

「き」は「し」と共に過去回想用語である。「き」という音声で伝えられる刺戟の強さは「し」の兄貴分と言いたい。修正のきかない過去を回想する言葉には断乎たる強さが必要なのかと思う。「し」よりも言い据える力が強い。例えば啄木の

あの頃はよく嘘を言ひき
平気にてよく嘘を言ひき
汗が出づるかな

という歌、よく嘘を「言ひし」過去を、よく嘘を「言ひき」と言い切っている。

万葉集には「き」の歌が少いようである。調子の強さが嫌われたのであろうか。それにくらべると土屋文明の歌には「き」の多いことが目立つ。気性の故であろうか。

神名帳写すと君と骨折りき寒き日なりき戦のさ中なりき（青。三九）

万葉集に二つののは一首かあったようであるが三つののは無い。四つというのはどこにもないだろう。

思ひたわみこの谷深く歩み入りきいかなる刺戟にもすがらむとしき（青。十四）

これは二つである。思い屈して谷深く歩み入りし日、いかなる刺戟にもすがらむとせし日の回想であるが、毅然たる清潔な感じがするのは「き」の語調の故か。

さくら鍋硬かりければ豚にかへき左千夫先生との最後の食事（続。四二）

浅草あたりでのことだったか。回想の感情の潮騒は「き」におし鎮められている感じである。文明の歌には「き」が多いだけに、「き」という言葉の働きを学ぶたよりは多い。

川に向きま昼とざせる二階ありああ吾住みき三十五年前（青。五五）

上諏訪の旧居を汽車から見て通ったのかと思う。三十五年

前に住みし家。「き・し」は過去回想用兄弟語。

恋ひこひき此はこれ筑前深江村おそき月出で
道の白しも（青。四九）

「恋ひこひし」筑前深江村をついに訪ね得て、さて過去をかえりみて、「恋ひこひき」と言っている。「き」は終止形、「し」は連体形。文法のかような名を覚えるよりも、「き」と言い据える調子を身につけ、それがとけるような気味で他の言葉と結びつく時「し」と変る呼吸に慣れれば、やがて借り物でない自分の言葉となる。

日に霧らふすすきうつくしき峠なりきはじめ
ての修学旅行小学四年（青。一八一）

すすき美しかりし峠の思出である。小学四年の時行きし旅行の回想である。すすきに霧らいし日の光。き・しは兄弟語である。

麦からを焼く火の赤き道なりき進まぬ馬を打
ちやまぬ御者に（続。一七六）

御者にの「に」をどう扱うか。土屋先生の歌は国語の力を強くするによい教材である。

荷を持ちて夜の道にも先立ちき進みたたかひ
帰り来らず（青。六七）

戦死した友の回想である。「き」の持つ情は一首の中のほかの言葉にも「持ちし」「先立ちし」「進み戦ひし」というよ

うにつながる。全体が示す回想の情が言葉としては「き」の一つに代表されている。

貧乏に生みしは神の過（あやまち）と笑ひ左千夫先生も
苦しみましき（青。一二三）

貧に苦しまれし伊藤左千夫先生の追憶である。

保守に傾く周囲の力もありしかど進む子規を
ば妨げ得ざりき（続。一四八）

「ありしかど」は「ありき。されど」と言うに同じである。「しか」を加えて「き・し・しか」は三兄弟である。「き」も「しか」もゴタゴタは起さないが、「し」だけは「たる」と近づきすぎてうるさい。

万葉集の「き」の例をすこし拾ってみる。巻数と歌番号だけを（　）内に。

他辞（ひとごと）を繁（しげ）み言痛（こちた）み逢はざりき心ある如（ごと）な思ひ
吾背子（わがせこ）（四。538）

情（こころ）ゆも吾は念（も）はざりき又更に吾が故郷（ふるさと）に還（かへ）り
来（こ）むとは（四。609）

音に聞き目には未（いま）だ見ず佐用比売（さよひめ）が領布（ひれ）振り
きとふ君松浦山（きみまつらやま）（五・883）

一つの方法

こうすれば「し」がよいか「たる」がよいかの診断が、定規をあてて線をひくやうに簡単に明瞭にできると言っている医者がある。彼のいう定規は次の知識。

「し」　―　「き」　―　（過去）
「たる」　―　「たり」　―　（様子）

この定規を迷っているところにあてる。例えば次の歌

濃き緑淡き緑の重なりし新燃岳に朝の日がさす

この歌の「し」の診察を頼むと、その部分をつぎのように

して並べる。

A　新燃岳に濃き淡き緑重なりき
B　新燃岳に濃き淡き緑重なりたり

そして声を立てるようにして読ませる。AB　どちらがスンナリ頭にくるかを感じ分けさせる。よいと思う方に◎をつけさせる。この歌だと十人が十人、Bをとる。すると、その歌のそこは「重なりたる」としなされという。

「し」と「たる」は近寄りすぎて区別が感じ分けられなくなっているが、終止形の「き」「たり」を感じ分ける神経は、まだ比較的達者だという。「し・たる」に迷うところを「き・たり」としてみる。ただそれだけのことであるが、わかりが早いという。

勤めより帰りし吾と商ひに出かける妻と玄関に逢ふ

A　勤めよりわれ帰りき

B　勤めよりわれ帰りたり

この歌の情景を想像しながら読めば誰もがBに◎をつけるであろう。それならそこは「たる」にするがよいということになる。

もつれたる絲ほぐしゐる指先にしぐるる雲をもれし日のさす

A　絲もつれき

B　絲もつれたり　◎

A　しぐるる雲を日もれき

B　しぐるる雲を日もれたり　◎

この歌は「もつれたる絲ほぐしゐる指先にしぐるる雲をもれたる日のさす」がよいということになる。

「たる、たる」と「たる」が二つになることを訴えると、それなら「しぐるる雲をもるる日のさす」はどうかという。こんどは「しぐるる・もるる」と「る」が多すぎるというと、それなら「しぐれの雲をもるる日のさす」としたらという。軽薄に感じられるほど、よどみがない。そういうと、それでも過去でないことを過去にするよりよいだろうという。

土掘りて並べし丸太踏み下る象谷村に続く山道

A　土掘りて丸太並べき

B　土掘りて丸太並べたり

「丸太並べき」は何とも調子がよくないと誰もが思う。それが「並べし丸太」と続くと、その感じの悪さがわからなくなる。何の苦もなく皆がB◎で、この歌のそこは「土掘りて並べたる丸太」ということに落ちつく。彼は言う。何とでもして口調から神経を矯正しなければ「し・たる」の混乱は直らないと。

早すぎし電話の切り方を思ひつつ腫れたる指に湿布してをり

A　電話の切り方早すぎき
B　電話の切り方早すぎたり　◎
A　指腫れき

B　指腫れたり　◎
（早すぎたる電話の……腫れたる指に……）

癒えそめし父のかたへに一日をりカマドに炊きし白飯食みて

A　父癒えそめき
B　父癒えそめたり　◎
A　白飯炊きき
B　白飯炊きたり　◎
（癒えそめたる父の……炊きたる……）

水分の神と伝へし真清水に春の木もれ日白く透れり

A　その名を水分の神と伝へき
B　その名を水分の神と伝へたり　◎

（水分の神と伝へたる……）。「伝へたる」が長すぎると思うなら「伝ふ」ると短くしても意は十分に通る。「透れり」を「透りたり」として読みくらべて語調に慣れるがよい。彼は慣れを強調する。言葉は慣れだよという。

すつぽりと雪におほはれし阿蘇五丘雲かとまがふ煙吐く見ゆ
A　阿蘇五丘雪におほはれき
B　阿蘇五丘雪におほはれたり　◎

（…雪におほはれたる……）「覆はれたり」といえば、覆われている景色が見えるような気がする。

迫力と文法

躊躇なく点ぜられた色、一気に引かれた線、それがかもす迫力、画面から来るその迫力に似たものを土屋文明の歌は感じさせる。よどみなき言葉の駆使——

道に倒れし馬なりしことは後に知りき幼くて
食ひし肉といふもの（青。一六三）

しもきも過去用語であるが、その過去も、主として自分の直接経験した過去を語る場合が多いということを、この歌は教える。

「道に倒れし馬」の「し」には、自分も見たあの馬という

意味が出ている。「倒れたる」では一般的な行き倒れ馬のことになる。幼年で最初に経験した肉食が、自分のあわれんで見た馬の肉だったことを、しかも後に知りきである。「後に知りたり」では「後に知りき」のやるせなさが出ない。「き・し」にははじめからそういう働きが備っている。

選者先生方に

選者には、経験のない者にはわからない気苦労があるらしい。ひとに苦労の種をふやして押しつけようなどとすることは、よくないことかもしれないが、

出征の幟を染めし羽織裏いまなき夫の名かすかに透きぬ

という歌の「染めし」と「染めたる」とどちらがよいかなどという質問が、投稿家たちから選者に寄せられるようになってもらいたい。というのはこの歌の作者の別の歌が、同じ日に、別の選者によって入選、同時に発表されているので思い

ついたことである。別の歌は、

家建てむとやつと買ひたる篠薮を刈りに行く
子の握り飯つくる

というのである。前の歌の「染めし」とこの歌の「買ひたる」との「し」と「たる」の違い、それを投稿家たちから質問されたら、どう指導するであろう。そういう疑問をなるべく早くなるべく多くの短歌作者たちが持つ日の来ることを国語のために歓迎するが、選者の厄介を思いやらぬでもない。

選者と呼ばれる人が日本中に幾人いるか知らないが、投稿家の数にくらべたら極めて少いにきまっている。その少数の選者が「しとたる」の区別を立てて指導してくれるならば、短時日の間にそれは常識として投稿家たちに行きわたるであろう。この二つの歌の作者は必ず、そんなことはどうでもよいとは言わないであろう。言葉はどんなに無造作に使う人でも神経を使って出す。

よしきりが恋しと便りして果てし子によしきりは啼く兵の日も今日も

という歌が出ていた。この「果てし子」は土佐日記の「死にし子顔よかりき」を思い出させた。「し」はそういう場合に使う言葉であるということを短歌作者たちに徹底させたい。どんなに気持の上に自由を得ることかと思うからである。

落陽は仏の色と言ひし夫よ吾れは蔵王の夕映に泣く

これもその日の入選歌である。「し」が正しく使われているから、与える感動も澄む。ところが

久々にわが油絵の売れし宵蚊帳買ひたしと妻

言ひ出でぬ
植ゑし・日の苗は稚しうす陽にも小さき風にも
細き葉を撼る
剪毛を終へし・羊ら駆けゆくと草野の果に那須
岳煙る

というような歌の方が多いので、「しとたる」への疑問が絶えない。これは文部省が例の「許容案」を試みて、今日以後「し・たる」の区別無用と言ってみたところで無くなる問題でない。放っておいて多数の発生した頃に多数決で言葉の命を抹殺するのは悪い。

本当に国語と国民の精神の関係を考えるなら、一語一語の命を護り生かすことは真実を生かし護ることであるという気風をおこさなければならぬ。そういう考えは戦争につながる

などとは、どんな新派も言うまい。

これらの投稿歌は、昭和四四、六、二一の朝日歌壇からである。朝日歌壇は新仮名で、その俳壇は旧仮名でいっている。選者たちの意見によると聞く。そうすると歌壇の選者たちは俳壇の選者たちよりも新派なのかもしれない。これは大事な国語、文語のためには不幸なことである。

戦後の国語改革は、便利を言葉の命そのものよりも重く考える人々の一応の勝ちであった。しかしそういう考え方が世の中をどう動かして行くかの結果が、いろいろ目につく時になって来た。選者たちが国語のために本気になってくれる時が待ち遠しい。

慣用といふこと

須賀さんと仮りにいう。須賀さんはアララギの重鎮である。先年はからずも同席のことがあって談たまたま「し・たる」に及んだところ、慣用ということで「ワザあり」をとられた感じのまま別れた。はじめて会ってそのままという間柄であるが、以来須賀さんの歌には特に注意している。

言葉は変る。いろいろな都合でいろいろに変る。本来の意味が変って新しい意味に使われる。その変って落ちつくまでの間に慣用の時代がある。２ＤＫの生活でも「奥様」は不思議なく通用する。しかしそういうことと、「し」と「たる」

の問題は違う。

畑の葱のさきが黄色くなった。それは「さき枯れき」か「さき枯れたり」か。「先き枯れし葱」か「先き枯れたる葱」か。

そういう葱に米磨ぎ水をかけて培うという須賀さんの歌を見た時手紙を書こうと思った。須賀さんの歌は、「先き枯れし葱」である。ウタヨミたちの一番小さな仕事としてでも、この「し」と「たる」の混乱を正してもらえないか。神経は使わないと役をなさなくなるというから、この二つの違いを感じ分ける神経の保存を短歌人たちの一番小さな仕事としてでも取り上げてくれるように考えてはくれまいかと、手紙を書こうと思った。

「お」と「を」との区別などする必要はない。「を」という仮名は葬れ。そういう意見の持主が、戦後の国語改革運動者

の中には沢山いる。幸にしてそこまでは彼等ものさばり得なかったが、そういう連中にかかったら、「し」と「たる」との違いなどということを考えるのは愚とも痴とも沙汰の限りだと言うであろう。日本に文語の世界というものの健在だったことは、どれほどよいことであったか、だんだんわかって来るにちがいない。幾度も言うようであるが、キリスト教会が聖書を口語に改めたことを、どのくらい後悔しているか。口語でも詩を書くが口語には詩的なひびきが乏しい。口語短歌などは、先枯れどころか成り立つ時は無くて終るだろう。文語は、短歌以外の人が誰一人相手にしなくても短歌のために大事にすべきだ。

だから須賀さんにも、できることなら慣用説を軽んじて、言葉の命を生かすことが短歌作者に与えられた天職の一つであるという古い旗の振り手になって貰いたいと思った。米磨ぎ水をかけて培うということも慣用で通用しているが、土をかけて養うことがツチカウである。水をかけてツチカウはすこし変でしょうと、我を折って貰いたいばかりに皮肉もまぜて手紙を書こうと思った。

寒明けに斑雪の降れるこの峡は吾が耳鳴りの
外にこゑなし

私も耳鳴りのひどい一人なので、いいなと思って読んだ。第一、斑雪の降りしなどとなっていないことが嬉しかった。

杜の樹を伐りたるあとの寂しさや杣ら火を焚
く煙のぼりて

これも「伐りしあと」でないことが嬉しかった。慣用的でない方がいい。

慣用という既成事実を造りあげておいて、否応なしに無理を通すことを政治が、権力が、どれほど武器として用いるかを思えば、慣用ということが、どれほどいろいろよくない内容を持つかを考えなければならない。

須賀さんなどがそのその慣用説をすててくれれば、その地方はいうまでもなく、どれほど多くの改宗者が出るかしれない。国語のために、短歌のために、それから須賀さんのために祈るはこのこと。

橋本徳寿先生に

短歌研究昭和四四、六月号で、先生の

「し」の議論なすにまかせよ文法のみめぐみ
深し飢ゑしむる勿れ

を発見しました。来たなと思いました。考えました。

「なすにまかせよ」は、どの方向にむかっての笛でしょうか。多くの短歌作者たちに、「あんなこと、気にする必要ないぞ」ということでしょうか。それだと困るし、第一ウソだ。先生もまた、こういう問題を「微視的」とお考えのお一人でしょうか。そう考えました。

「文法のみめぐみ深し」は文法のおかげで生活している人間が多いということでしょうか。それならこれは本当だと思いました。月刊の文法雑誌がいくらあるか知らぬが、そこからの稿料をあてにしている先生方の数も少くはありますまい。文法のみめぐみはそんなところでしょうか。すこし解釈が下賤かとも思いますが、しかし「し・たる」が窮地におとしいれられて、もがいているのを見殺しにしそうな文法の先生たちのことを思うと「文法のみめぐみ深し」は、なかなかの皮肉で結構だと思いました。ただ私一人の場合は、そのみめぐみに浴していないので、次の「飢ゑしむる勿れ」は御親切な忠告かと思いました。ただ遠からず宝くじがあたることになって居りますから御安心下さい。飢えしめじと言って集まる人々のふえるよう御力添えいただかれますれば幸甚。こ

の問題がそうして先生の歯にかかるようになったことを、「し・たる」のために嬉しく思います。下世話で「××も味噌も一所」と言いますが、短歌界には「しもたるも一所」の歌が多すぎはしませんか。

T君に

青年短歌作者のT君が、もうせん、歌集『冬木』（佐藤佐太郎氏）の出た頃、その中から「し」の疑問例を沢山あげて示されたことがある。その中の十首だけをあげてみる。

山寄りに木立のなきは雪の野に埋れし・川のあ
りとおもはん
春たけし・村みちくれば堰ありて田打花さく朝
日のにほひ
ひるすぎて雲そきそめし・空の青たちまち雪の
おもてに動く
冬空の青のふかきに音たえし・昼にて椎の梢が
そよぐ
ふるさとに似し・冬山の香こそすれ櫟の枯れし・
葉は光りつつ
青々と島のあひだにいりくみし・海みえをりて
わたる松風

あるときは波音きこゆ黒々となだれし・山の遠
き下より
飛行する夜空にみれば地上にてあげし・花火の
ちひさく開く
おごそかに地のうへ暮れて夕雲のきはまりし・
赤遠くなりゆく
荒波の上につきいでし・石塊のごとき古城に雨
しぶき降る

次の時代をになう若い作者たちが、本気で、そんな問題があるのかと、「し」と「たる」に取り組んでくれるのはありがたい。日本から、体裁のわるいことを一つ一つ減らして行くことは日本人のつとめである。しかし歌会でも「し・たる」

など持ち出す機会は無いという。いますこし高尚な話のかわされるのが歌会であるという。私はそれをきいて、

翁忌や皆十哲の面構

という句を思い出した。皆十哲のおももちでこむずかしく構える様子を想像した。しかしT君などが、ひそかに「し・たる」の研究を心がけているという事実を短歌界のために喜んだ。

T君は名を出してくれるなという。そんな気づかいを必要とするのかと、いま一度短歌の世界を思いやった。

T君よ、ありがとう。こうして稿をつづけながら、いつも君たちのことを思う。これらの歌の「し」はいずれも「たる」がよい。上の言葉とのつづきぐあいで「る」とするもよい。例えば「きはまりたる赤」でなく「きはまれる赤」というように。「たる」と「る」は同じで、ただ上の言葉とのつづき

方によって使いわける。「たる」の「た」の消えたのが「る」であるという。無論一字語と二字語とであるから重さもひびきも違うが、「し」と「たる」とのように性質までは違わない。

杉ケヤキ三百年を経たりとてたふとむものを国語はいかに

世と共に移り気楽にこだはらぬ人等に言はむことにはあらず

たまあひてのめば楽しもさむるときさびしとならば歌をよむべし

編集後記

木島　茂夫

▽一首の表記に於て、**し**でも**たる**でも、どっちでもいいじゃねえかという言いぐさはありえない。これは、**し**と**たる**のみに限らず、**てにをは**一字の選定を誤っても、表現の誤差は作品の内容を大きく変貌してしまう。文芸に於ては、作品以前に、如何なる背景や内容があったとしても、最終的には提示された表現が内容を決定してしまうからである。

▽仮に、美女が二人いるとする。この場合、先輩は必ず、どっちでもよい、お前の好きな方を選べ、あとは俺が引受けるというような顔をする。これが曲

者である。未経験者の大方は、両者を欲しがるが、努力を惜まず一者を選ぶべく心掛けねばならぬ。何の為に何がよくて選定するのか、己れを省み、眼前の「美」と「正」にこだわってみることだ。

▽生きるとは、自殺する以前に、ひと先ず「生」にこだわることである。ベトナムの最前線に於て、一中隊全員が、前進命令を拒否したという。誰もが、**正**と**美**を欲している。乃ち**し**（死）にこだわり、**き**（生）にこだわることが生きることである。

▽行蔵先生が、冬雷月例歌会で、**し**のお話をされなくなってから何ヶ月になるだろうか。確かに、講義中は出席者の大半が居眠りをしていた。本号出版により、救われる思いがする。馬の耳に念仏というが、眼前に見る場合、馬も鹿も、眼前に停止している活きている活字に対し、こだわること位いは出来るだろう。冬雷会員は、ひと先ず**し**と**たる**にこだわってみようじゃないか。

▽本号を臨時増刊号とする。総ては、行蔵先生の自費出版に依るものである。会費既納者も未納者も、一ヶ月分を加算されたし。いずれも当会会計のテコ

入れとして充当される。

▽本来なれば、斯かる出版費は、「し」に学ぶ集いとして、当会が負担すべきことがらである。その点を行蔵先生に繰返し申し上げたのであるが、先生はどうしても、お聞き入れ下さらぬのである。読まれざる歌集、読まれざる歌論集の定価が千円の世の中である。

▽行蔵先生仰す。「出版費は、ヘソクリなんだよ。」これを聞いて総ては決定した。ヘソクリは一夜にしてならず。目的をもってヘソクラレタ金銭は、その目的に使用されることを望んでいる。ひたすら平伏あるのみ。

▽四斗樽を一夜に呑み干すは危険である。

（昭和四十四年十月）

四斗樽　圧縮版

解説

大山　敏夫

冬雷唯一の臨時増刊号がこの『四斗樽』（太田行蔵著）である。昭和四十四年十月刊の第八巻第十一号にあたる。

用紙も誌面割付け体裁も通常のものとほぼ同じで、8ポ二段組み本文32頁。ただし、表紙だけはレギュラーを使わず太田行蔵本人の手になる墨一色の風景画となっている。木島茂夫の編集後記も付く（本書114〜116頁）。

いかにも酒好きの大人の洒落めいた題名だが、その内容は文語文法の過去回想の助動詞「し」の歴史を詳しく解説し、ひたすらその正しい用い方をと力説する大真面目なものである。

昭和三十七年、冬雷創刊の年に入会したわたしは、この時は二十二歳の頃か。わたしの印象では入会とほぼ同時にこの「し」の問題が持ち上がっていたので、つねにそこを意識しての作歌活動五十五年余の気がしたが、意外に入会後七年目の出来事となっている。

でも『四斗樽』の刊行は、この過去回想の助動詞「し」の誤用問題に取組んで来てからの一つの成果、一つの頂点を示すことであって、刊行に至るまでにはそれなりの歳月を費やしている訳だから、わたしの印象も間違いではない。

『四斗樽』冒頭の「かんのにぶり」の中に引用された二宮冬鳥の文章は、冬雷昭和四十二年三月号に寄稿されたものであり、そこには、

過去回想の助動詞「し」の誤用について私が高嶺にかいたのは、昭和三十二年七月であつた。その後も機会あるごとにかいてきた。そのうち冬雷に「人間土屋文明論」をかいてをられる太田行蔵氏が、私と同じ意見をもつてをられることを知つた。私と太田行蔵氏との文通がはじまつたのである。

とある。この問題を最初に指摘したのは二宮冬鳥で、その後に二人は巡り会った。二宮冬鳥の言葉をヒントに昭和四十二年以前の「人間土屋文明論」を当ってみると、文中で取上げる文明の作品に対し、明らかに「し」の誤用を意識し始めている傾向が見えるのは、ほぼ一年前の昭和四十一年二月号からである。二月号には文明の次の歌、

左千夫先生のことを話せば心かよひき先生の
よき所を君は教へき　　土屋　文明

についてこう述べている。

この歌を私は「き」といふ日本語の説明をする時に使ふ。「き」といふ助動詞は、この歌のやうに、きつぱりと、はつきりと、確信をもつて過去にあつたと言ひ得る事実を回想する場合に使ふ言葉である。文明の歌にはこの例が多い。

ここでは過去回想の助動詞の「き」の性格が論考されている。「き」は終止形、「し」はその連体形だから、ふっと吾に返れば「あれっ」て気のつくことであろう。翌三月号の「人間土屋文明論」には、

「し」の勘違ひ用法が現在の歌作り人に多すぎるといふことを、例へば歌

誌「高嶺」の二宮冬鳥氏が最近くりかへして言つてゐる。「し」は「き」と同様に過去の回想に使ふ言葉である。例へば百人一首の「天の原ふりさけ見れば」の場合のやうに。

とあった。「いにしへ」を「去に・し・辺」と三つに分解してみると納得がいく、とも噛み砕いて語る。わたしは、ここが大きなターニングポイントであったと思う。

太田行蔵には昭和三十八年に上梓した歌集『慕何雑詠』があるが、その中には幾らでもこの「し」の誤用された例が見られ、冬雷昭和四十一年七月号に於いて幹部会員の七箇心から手厳しい指摘を受けている。

アララギ月集から問題箇所を書き抜いたり、万葉集を精査したり、芭蕉や、蕪村の語法を達眼で見直して下さるのは、誠に忝ないことと云へる。しかし、指摘者自身、比較的近年まで、それ程気にもせずに使用してゐた語法につき、第三者に対し、これを正さうとするのであれば、単に指摘するだけでは済ませないと思ふ。即ち指摘者は、たとへ困難であらうと、代替語法を考案して提出するか、それが難しければ、極めて謙虚に問題点を放出

して見せるしかない訳だ。（略）太田行蔵氏は、まづ慕何雑詠にも誤用箇処ありとして（若し、在るものならば）、これに代替語法を与へ、然る後、アララギ等の語法に論及するのが近道ではあるまいか。（『助動詞「し」に就いて』太田行蔵氏の所説と実作）

と展開していた。先ず、吾が事として自分の作品の反省から始めよ、と言うのであった。

冬雷会員のすべてが太田行蔵派ではなかった。かくも活発な議論が内部に於いても行われていたのである。だが主宰者の木島茂夫の応援を受けて、「し」の問題は次第に冬雷全体のテーマとして大きくなってゆく。

七箇心から指摘された「代替語法を考案して」には、「たる」を思いついた。「し」は過去回想、「たる」は状態。これが良いってポンと膝を打った姿も想像される。自分も平気で間違えてきたではないか。そこを先ず謙虚に反省し対応せよ、という言には、『四斗樽』での次の言葉に託している。

気がつかないうちは仕方がないし罪もない。しかし言われてからも気がついてからも、かまわず歌えと開き直るのは無法者であり怠け者であり御機

嫌取りの先生である。（本書24頁）

これが結局は落しどころの結論なのであろう。どう考えても、すでに定着してしまっている歴史的な作品には、今さら「たる」とか何かに訂正すれば解決なんてことではない。でも、そういう作品を冷静に熟考し、やはりちょっと変だよね、違うよね、こうした方がぴったりじゃないのかね等と考える余地があるとすれば、それを実行し、その成果を自分の作品に反映してゆけばよい。いま現実に短歌に携わっている進行形の作者にとっては重要なことと思われる。

「し」と「たる」と言うけれども、もともとは過去回想の助動詞「し」の甚だしい誤用乱用状態を憂いての言挙げであったのだ。「し」がどういう品詞で、本来どういう役割を担って存在しているのかを知らしめる啓蒙活動のやうな使命を感じてのことが発端と思う。ゆえに「し」を正しく使うとどうなって、違うとどうなるのかを、明らかにしてゆくことには態度が自ずから毅然となる。でも「たる」については、初めから語用乱用を取り沙汰されるものではない。「し」か「たる」か二択の問題ではないことを忘れてはならない。

本文最後に付いた禿頭翁のカットは、著者が落款代わりにいつも使った自筆

である。その絵に添えられた三首も書き下ろしの自作短歌だった。

世と共に移り気楽にこだはらぬ人等に言はむ
ことにはあらず

と言うが、一見そう見える人達にも振り返って貰い、ちょっと考えてほしいというのが本音に違いない。それだけの価値のある指摘なのだから、と思う。

太田行蔵と土屋文明の関係というのは妙だなって思うこともあった。そんな中で、アララギ本部歌会に乗り込んだという行蔵の話を耳にした。宮地伸一著『歌言葉雑記』の中にその日のことが書かれている。

太田氏は、アララギを見ては「し」の用法を気にして、いつも○や×をつけていたと言う。「冬雷」の本年七月の太田行蔵追悼号にも私は書いたが、太田氏はひいきするアララギが「し」の乱れを一向かまわないでいるのに業を煮やして、或る時夫子自らアララギの東京歌会に乗り込んで来た。「一匹狼が落ちぞと君に言はるれど言はでやむべきことにはあらず」という一首を引っさげて。それは昭和四十九年四月の歌会である。その歌会の途中

に太田氏は突然質問がアリマスと手をあげて、土屋先生に挑んだ。その時批評される歌の中に「捨てし」という表現があった。次はその問答である。私ははらはらしながらこれを聞いた。

○「捨てし」ト「捨てたる」ハ、ドウチガウカオ教エ願イタイ。

○両方同様。「捨てし」トイウ行為ニ目ヲ向ケレバ「捨てし」捨テテアル現状ニ目ヲ向ケレバ「捨てたる」デ、目ノ向ケドコロガ違ウダケダ。（と大声）

○「し」ト「たる」ガ同様トハイカガナモノカ。コノ件ハマタウカガウコトニシマス。

○マタウカガッタトテ同ジコト。

○「し」ト「たる」ニツキ、ナオ研究ヲオ願イシマス。

○研究スル必要ナシ

というわけで、太田氏の必死の切り込みも鎧袖一触であった。アララギから「し」の誤りを追放するのが悲願だとあとで私に言ったけれど、それはついに悲願のままに終った。

確かにアララギ（もっとも、そのアララギ自体今は存在しないが）から「し」の誤りを追放するのは無理であった。かく言う冬雷にしても同様だが、冬雷では「完全追放」が目的ではなくて、「どちらでも同じ」とせずに、拘って自分の信ずる正しい用法を「研究」し、推敲しようというスタンスだから、現状に悲観はない。

記事の中でわざわざ「と大声」と括弧入りで記されているのが興味深い。考えようでは（人によっては）ごく一般的な質問かとも思われるが、文明は何故「大声」を出したのだろうか。論争では俗に、声の大きな方が勝ちだといわれるが、興奮して出す大声としたらどうなのか。文明の中に、苛立ちがあったとすれば、それは何だろう。

文明の言葉をおさらいする。

○両方同様。「捨てし」トイウ行為ニ目ヲ向ケレバ「捨てし」捨テテアル現状ニ目ヲ向ケレバ「捨てたる」デ、目ノ向ケドコロガ違ウダケダ。

つまり、「し」は行為であり、「たる」はテアル現状という判断をしている。この「しとたる」の説明は、『四斗樽』の中ではお馴染みの文言にも似ている。

文明も知らず知らずのうちに『四斗樽』の口吻が零れでてしまったのか。行蔵は内心シメタと思ったに違いない。そこで、

○「し」ト「たる」ガ同様トハイカガナモノカ。コノ件ハマタウカガウコトニシマス。

と、ここはいったん引き下がり、二の矢をつがえようと目論む。行為ではない「澄みし水」とか「咲きし花」とか「テアル現状」の場合での「し」には何と答えるか、楽しみだ。そんな心根を見通した文明は、

○マタウカガッタトテ同ジコト。

と、突っぱねる。打打発止のやりとりが面白い。文明の策戦勝ちのようである。おそらく、行蔵の出現によって何が起こるかを予期し、ああ言ったらこう応えるという心積もりは出来ていた。問答無用で相手の口を封じる一手である。この結果、わたしにしても様々な用例にそっての文明の考え方を聴きたかったと思うが、おじゃんとなってしまった。残念でならない。

問題になった歌の「捨てし」が作者の行為であったのか、他者の行ったことの残した「現状」だったのか、その批評対象となった作品を知らないので解らないが、文明の言葉からは、「し」は主に「行為」であり「現状」を言うには「たる」が良い、ということになりそうだ。

そもそも議論にもなっていない内に一方的に打切られた状態に「鎧袖一触（がいしゅういっしょく）」は当らない。

言葉も文法も時代によって変化して行く、それを否定するものではない。でも、納得出来る変化とそうではないものは確かにある。それが「乱れ」と云われる範疇なら、その変化に加担したくはない。「し」の語法の変化は「乱れ」なのか、「納得」なのか。

そこを「し」にしなければならない根拠に説得力が求められる。文法的には、今でも本来の意味は「過去回想の助動詞」が一番目に据えられている。そこに敢えて、「慣用」を当てて押し通すのは無謀に等しい。まして、「し」にそんな意味があることを知らなかったでは問題なのである。助動詞「し」には、本来はこうした役割があるということをしっかり認識した上で、こだわった上で、敢えて選択する確固とした意志を持った使用を冬雷会員（短歌作者）には求め

たいと考える。

『四斗樽』の最後に出て来る「T君」はわたしのことである。〈名を出してくれるなという。そんな気づかいを必要とするのかと、いま一度短歌の世界を思いやった。〉とあるが、心配して下さるような気遣う人など、歌壇には当時も居なかったので「名を出すな」と言ったとしたら、わたしの実名より匿名の方がインパクトがあると判断したからだろう。敢えて匿名にする効果もあるのだ。

「し」は間違いだ、でも「たる」とは言いたくない。そうなるから推敲は難航する。単純な差し替えではない、全体改作に行ってしまうことも稀ではない。本書の中に度々出て来る「し」「たる」の比較と差し替えには賛成だが、それがベストだとはならぬところが、歌作の複雑な実態なのである。

この『四斗樽』が、二宮冬鳥の歌壇へ発した提言に力を得て進められてきたことは書かれている通りであるが、その「高嶺」は平成三十年に通巻一〇二二号をもって惜しまれながら終刊となった。その後この「し」のこともあったのだと思うが、二十名以上の方が冬雷の仲間に加わることになる。こんなことを

当時の誰が予想しただろうか。何か目に見えない運命の糸のようなものを感じてしまった。

今年はちょうど創刊六十周年にあたるので、何か記念になることをしなければならないとは思いつつ、折悪く、昨年初めより地球規模で感染蔓延となった新型コロナウイルスの影響で、人が集まることもままならず、編集委員も直接に顔を合わせて相談するということもかなわず、やや準備不足ながら、この『四斗樽』をリメイクしてあらためて世に問い、会員への作歌資料にすることを決めた。またまた『四斗樽』か、ともいわれそうだが、雑誌用の選歌をしながらも、いまだに「し」の誤用、慣用問題に頻繁に遭遇する。その都度これは斯く斯くしかじかと説明せねばならぬ状況が続いている。そういう会員のためにも、本書は効果をもたらすことだろう。

すでに世は昭和ではなく平成も通過して「令和」である。七十代以下は新仮名遣いのなかで育ってきている。そういう中で、未だに旧仮名遣い表記はないだろうと考え、熱烈な歴史的仮名遣い推進派だった著者には申し訳ないが、本書は、細部はママながら、最小限箇所を改める現代仮名遣い表記に作り直した。

その際に再編集し、かねてからいくぶん明瞭に理解でき得なかったいわゆる灰色部分の作品に関わる解説などを割愛し、あまり重要と思われない部分も大胆に削除した。初版『四斗樽』とはかなり趣を異にしていよう。

表紙カバーには、臨時増刊号『四斗樽』と、二〇一五年に連載した「完全復活版『四斗樽』」掲載号を並べて撮影したものを使った。

この書は、過去回想の助動詞「し」の問題がどこにあるか、どこを気をつければ良いかを、明確にしたいがために作られたものである。何としても先ず改めて行きたいところを極言すれば、「慣用」と云われ容認、乱用されている「し」の見直しなのではないかと考えている。

（二〇二一年六月　大安の日に）

あとがき

小林　芳枝

昭和三十七年創刊の『冬雷』は今年六十周年を迎えた。人ならば還暦という大きな節目である。何か記念になるようなことをしなければと思いながら昨年から世界中に広がった新型コロナウイルスの蔓延が治まらず月例会も大会も中止、校正などの作業も全てオンラインに変更して現在まで顔を合わせることが出来ない状態が続いている。半ば諦めていたところ大山編集長から、太田行蔵先生の「四斗樽圧縮版」を文庫で作ってはどうかという案が示された。

昭和四十四年十一月号に臨時増刊号として生まれた『四斗樽』は歌の「し」と「たる」の誤用について例を示しながら丁寧に説かれた太田行蔵先生渾身の

一冊である。口語の「た」を過去回想の「し」とする誤用について現在では誰も疑わなくなっているようにみえる。月々の投稿歌にも多くみられるので添削希望の場合は訂正するけれど、そうでない方の歌をどうするかで悩むことも屡々である。ここでもう少し分かり易く作り直して考えてみよう、ということに編集委員全員が賛成し、この度の企画となった。

冬雷には二〇一五年四月号から四ヶ月に渡り掲載された完全復活版『四斗樽』の連載がある。大山編集長が増刊号を全てテキスト打ちしたもので読み応え十分であった。原本よりは読み易かったがこの文庫は更に工夫されている。原文の旧仮名遣いを新仮名に改めて読み易くしたり、引用歌が多すぎて煩雑な部分をカットしたりして改良されている。全てがパソコンでの作業なので編集長が一人で作り上げたものであるが、原文と比較してみるとすっきりとして分かり易くなっている。

文中で太田先生は「文法のためにというのではなく」と何度も添えて居られる。「し」と「たる」を正しくするのは「歌をすっきりさせる・意味や調子をシャンとさせる・言葉の音色の違いを感じ分けられるようになる・言葉の持つ命を

無視しない」等のためになるのだと仰る。これは、歌を作る根本となる意識に繋がっているのではないだろうか。三十一文字で正しく自分の思いを伝え得るための一語の大切さを熟知している人の言葉であると私は受け止めてきた。過去は過去、今は今として正しく表現することで歌の奥行が違ってくるということを一人でも多くの方に知って戴きたい。木島先生の編集後記の次に大山編集長の解説がある。その中の126頁に重要なカギとなる土屋文明の言葉がある。アララギの歌会に乗り込んで「しとたる」について質問した太田先生に対して

○両方同様。「捨テシ」トイウ行為ニ目ヲ向ケレバ「捨テシ」捨テテアル現状ニ目ヲ向ケレバ「捨テタル」。

と、きっぱり答えて居られる。以前に、自分か誰かが捨てたという行為を詠むときは「し」を使い、捨ててある物の状態を詠む時は「たる」にすればよいと説く。多くの人が混同するのには難しい部分もあるのだけれど迷った時の指針になる見事な回答である。

少しふざけているような木島先生の編集後記は「一首の表記に於て、しでもたるでも、どっちでもいいじゃねぇかという言いぐさはありえない」から始ま

る。そういえば題名の「し」と「たる」を「四斗樽」にしたのは何方だったのだろうか。お酒好きの先生らしい編集後記は決してふざけているのではなく大真面目なのである。「しとたるのみに限らず、てにをは一字の選定を誤っても、表現の誤差は作品の内容を大きく変貌してしまう」と続けて言葉の大切さを説き、本気でこの問題に拘ってみようと冬雷会員に呼び掛けている。

ある時木島先生は「歌の中に雑草という言葉があるが、雑草という名前の草は無い。どの草も名を持っているのだから心惹かれて歌にするなら名前くらい調べて詠め。それが愛だ」と言われたことがある。言葉で自分の思いを伝えるのだから大切に正しく使いたい。分からない時は面倒と思わず調べてみよう。この本には「しとたる」の参考になる資料が詰まっている。

長い間、私の本棚に眠っていた臨時増刊号を改めて読みながら太田先生と木島先生、そして「高嶺」の二宮冬鳥氏の熱い思いが伝わってくる。今冬雷会員として歌を作っている我々の良き参考書としてこの本が役に立ち、末長く活躍する一冊になる事を心から願っている。

冬雷

四斗樽　圧縮版〈冬雷短歌会文庫 029〉

2021 年 10 月 1 日　印刷発行

発 行 人　大 山 敏 夫

データ制作　冬 雷 編 集 室

印刷・製本　㈱ローヤル企画

発 行 所　冬 雷 短 歌 会

〒 350-1142　川越市藤間 540-2-207